

## プリゴジーンの大博打——どう呼ぼうとこれは大逆である

<https://www.infowars.com/pomists/prigozhins-gambit-treason-by-any-other-name/>

Infowars/ Scott Ritter | Scott Ritter Extra

June 24, 2023



⇒決してこれを疑わないでほしい——ワグネル集団のリーダー、エフゲニー・プリゴジーンは、承知の上で、ウクライナと西側集団の情報機関の手先として動いたのだ。

1997年のディズニー映画のミュージカル-ファンタジー『ヘラクレス』の中に、特に注意を引く作品「ゼロからヒーローへ」 *Zero to Hero* がある。これは、この映画のスターである屈折した少年が、強く有能な人物にのし上がっていく有様を描いたものである。

ものの 24 時間の中に、エフゲニー・プリゴジーンというワグネル・グループの看板であり、ロシアの私的軍事請負業者で、ロシアの軍事情報との怪しい関係を持つ男が、この乞食から王様への物語のシナリオを創り上げ、あっという間に台無しにした。

この男は、すぐれた戦場での振舞いによってロシアを、愛国心と強さを持つ伝説的な組織に変貌させたが、突如、逆賊として仲間を率いようとし、一気に信用を失墜させた。彼の目論見は、ロシアを究極的に破滅させようとする数か国のために、定められた憲法をもつロシア政府を、暴力によって転覆させることだった。

もしディズニーが今日、プリゴジンとワグネルについてミュージカルを書くならば、それには「ヒーローからゼロへ」という名前がつけよう。

決してこれを疑わないでほしい——エフゲニー・プリゴジンは、承知の上で、ウクライナと西側全体の情報機関の手先になったのである。騙しと口上手によって、この大逆行為に、知らずして引き込まれた、ワグネル・グループの者たちがいたかもしれない。しかし6月24日のロシア国民に対するプーチン大統領の演説と、プリゴジンの拙劣な返答の結果から、この争いには2つの側面しかないことがわかる。すなわち、憲法による合法性と、憲法によらない大逆と扇動という側面である。誰でも、プリゴジンのクーデタに参加し続ける者は、法に違反する側を支持し、無法者となるのである。

ワグネルをこの不幸な道から引き下ろしたあとで、次には、このような危険な行動を取らせた動機——公言されているか否かを問わず——を問わねばならない。何よりもまずプリゴジンの大きな賭けを、そのありのままに観察しなければならない——それは自暴自棄の行為だ。その軍事的な威風はあるものの、戦闘力としてのワグネルは、ロシア防衛省の兵站支持がなければ、どんな期間も持ちこたえることはできない。ワグネルの車両を動かす燃料、その兵器に致死性を与える弾薬、その兵士を養う食料——そういったすべてが、プリゴジンが奪おうと目を付けた、組織そのものから来なければならない。この現実の意味するものは、成功するためには、プリゴジンは、彼の大きな賭けの理由を支持してくれる十分な援助が、背後になければならないだけでなく、ロシア国防相とロシア連邦の権力を誇示するものでなければならなかった。もしその条件がなければ、それはどんな大きな戦闘でも、ワグネルの軍隊を簡単に敗北させるであろう。

要するに、プリゴジンは「モスクワ・マイダン」と言われる、2014年初頭のキエフで成功した事件の再現を狙っていた。この場合、憲法に則って選出されたヴィクトル・ヤヌコヴィッチ大統領が、アメリカとヨーロッパに支持されたウクライナ・ナショナリストによって、暴力と強制によって権力から引き下ろされた。「モスクワ・マイダン」の幻想が、最初から、西側集団とウクライナ代理政府の戦略の中心にあった。これは、弱いロシア大統領が、完全に墮落したオリガルヒに支えられているという考え方を前提とするもので、国内不安が十分な条件となってプーチン政府が瓦解するという考え方は、2022年2月24日の特殊軍事作戦以後、西側のロシアに課する制裁の主たる目標だった。

そのような結果を生じさせる制裁の失敗は、西側集団に、ロシア政府を絶対に崩壊させる決意を更に固めることになり、今度こそ軍事手段を使うことになった。イギリス首相は、ウクライナ大統領に圧力を与え、2022年4月1日にイスタンブールで署名されることになっていた戦争終結の交渉を、反故にさせた。そして代わりに、ロシアとの長引く戦争を

約束させ、これは数百億ドルという軍事・財政援助によるもので、ロシアに国内不安を起こさせるのに十分な、軍事的損失を与えるためだった。

この努力も同様に失敗した。・・・・・・・・

### 【訳者 Greatchain 注】

この問題については、昨日今日（6/25・26）の新聞にも出ているが、我々には「ワグネル」というロシアの私的傭兵会社組織がよくわからず、ロシア政治情報の権威者とも目されるスコット・リッターの解説があるので、その一部を訳してみた。もちろんこれは最初の一部でしかないが、大体のことはわかるのではないだろうか。まずこれは、プリゴジンが自分の判断で動いたのではないということ、またこれは、政治的に対等なのが2つに分かれる「内乱」ではなく、憲法によって国を作った国家に対する「反逆扇動罪」であることがわかる。その点では、現在のウクライナも、正当な選挙によって選ばれた大統領（ヤヌコヴィッチ）を追い出して作ったクーデタ政権なので、正当な政府ではない。

ワグネルのプリゴジンは、このウクライナの例をロシアに適用しようとして、逆賊としてベラルーシに追い出されたということも、よく分かる。（ベラルーシはロシアの属国でなく、ロシア憲法の埒外にある。）これはロシア人同士が血を流すという最悪の事態を避ける、最も賢明な方法であったこともわかる。しかし、これですべてが解決したのではなく、この事件で方法を覚えたCIAやMI-6が、どう出るかわからないと、リッターは言っている。

この反乱を聞いて一番喜んだのは、予想通り、ゼレンスキーだった。その次に喜んだのは、どんな国の事情も事実もまったく考慮しない、わが国政府ではなからうか？ 失礼かもしれないが、わが国政府を長いこと観察していて、そう考えざるを得ない。